
電子防衛学校のゲーム戦士達

ハナモト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電子防衛学校のゲーム戦士達

【Nコード】

N7370X

【作者名】

ハナモト

【あらすじ】

2027年、次世代ゲーム機が発売された。当初は立体感が楽しめる優れたゲームだったのが突如、その様相が変化した。現実に影響するゲーム。一旦はゲーム会社により回収されたものの、再び発売された。今度は兵器を兼ねて。アビリティソルジャーと呼ばれるそのゲームを巡って皇兄弟が動き回る。

01 入学

2027年、ゲーム会社キユーガクが新型ゲーム機『ヴァーチャル・ゲーム』を発売した。

目から上を覆うメットタイプのゲーム機であり、自分がそのゲームの主人公になり、実際に動いているように感じる事が出来るものだった。

ソフトが無く出来るゲームは一種類、『無敵白兵戦士』という戦争ゲームだけだが、その分内容が充実している。

戦闘のために用意されたエリアはAからZの26種類。

装備品を手に入れて強化するというのが楽しみ方の一つだが、それ以上に個別能力と呼べる物が話題を呼んでおり、各個人の能力や適正で様々なものがランダムで確定される。

この能力確定には脳波と遺伝子情報が特に大きく影響され、能力が重なることが無いわけではないが、威力や精度などかなりのずれが合ったり、似た能力でも発動条件が違ったりなど多様だ。

もちろんネット対戦も可能で、むしろそちらをメインに作りこんであつた。

ネット対戦時のみ作られたエリア以外でプレイ出来る。

そのエリアは現実世界そのものを指す。

衛星通信と繋げることで現実のどの範囲をエリアステージにするか選択可能で、建物の中には入れないものの、近所を舞台にしたり、有名な観光地などで戦闘が出来るというのは魅力的だった。

戦闘しないでも観光を楽しむことも出来て、当初の開発者が考えもしなかった事だったが、最終的には宣伝材料にもなっている。

ヴァーチャルゲームの人気は過去のゲームにも類を見ないほどだったが、発売から二年後の2029年、ある装置が出来たことでリコールにまで追いやられることになる。

その装置とは物質転送装置だ。

遠くに物を転送するという、長年の科学の夢がついに実現になった形だったが、ヴァーチャルゲームに予期せぬ大きな影響を与えてしまった。

転送装置の原理は物質を一度電子にし、それをまた物質にすることで転送を可能としたもので、ネットに繋ぎさらに効率化したのだが、何がどうなったのか、本来無関係のネットだったはずのヴァーチャルゲームのネットとも繋がってしまい、ゲーム上の行動が現実世界に影響するようになってしまった。

現実世界を舞台にした戦争が出来るのは前述の通り。

その場合に建物を攻撃したとすると、実際の建物に攻撃の痕跡が残り、酷いものでは倒壊させてしまっている。

この物質転送装置の影響はヴァーチャルゲームが子供の玩具でなく、兵器へと変わってしまった瞬間でもあった。

すぐさまキユーガクは全てのヴァーチャルゲームを回収、政府までもが動き、回収に協力しない者は銃刀法違反が認められるようになった。

ただしそれでも世界中に散らばったこのゲームを回収するのは不可能だった。

ある国などは積極的にヴァーチャルゲームを集め、本格的な兵器として転用しようとしたが、幸い転送装置の技術が未熟だったため兵器としての開発が進まず、使用されることは無かった。

だがこのゲームを兵器として利用しようと考えた国はこの国だけでなく、世界全体が緊張状態になる、という異常事態に陥った。

それは日本も例外ではなく、むしろ積極的に研究を進め、10年後の2039年には完全に兵器として完成したものになってしまっていた。

だがその10年という時間は国際法を整えるにも十分な時間であり、大きな問題にはとりあえず至らなかったが、時間の問題だということとは誰もが分かっていた。

各国でヴァーチャルゲームを兵器として扱えるスペシャリストの

育成を重視するのは当然の流れで、より効率的にこのゲームの上級者を探すため各政府から――世界からキューガクにヴァーチャルゲームの再発売を求め、その結果『ヴァーチャル・ウォー・ゲーム・システム：略称VWGS』と名前を変え日本だけでなく各国で再発売された。

またソフトは『アビリティソルジャー』と改名され、VWGSを指す言葉として略称のアビソルが世界中の共通語となった。

世界で発売した理由は日本で発売したら、すぐに似たものが各国で発売されるのが明白だったため、それならキューガクが独占する方が好ましい、と政府及び経営陣が判断したからだ。

新しく発売したアビソルは現実世界に影響が出ないようにもちろん修正がしてある。その逆に影響を出すことも出来るが。

再発売から5年後の2047年に日本で国立電子防衛高等学校が開校された。

より優秀なプレイヤー、否、兵士を教育するための学校だった。そして開校から20年の月日が経った。

国立電子防衛高等学校、通称電高の用意した特設エリアに彼は居た。

懐かしい感覚に、手を握ったり開いたりという動作を繰り返す。周囲には100人の人影が彼を取り巻いている。

突如、荒野にピーっと高い2重の機械音響き渡る。

試験終了の合図だった。

荒野には彼を除いてただの一人も人影は無い。

空中に浮かぶ電子掲示板に記録が提示され、時間は0・285秒でランクはS。

その速度は開始の終了の合図が重なるほどの速さだった。

(……足りないな)

リンクを確認するとすぐさま彼はログアウトする。

「弱すぎるな」

「仕方ないよ、元々倒されるために用意されたNPCだし」

アビソルのメットを外しながら落胆している龍斗に、さも当然というふうにはベッドに据わる龍斗がノートパソコンを弄りながら答える。

アビソルのメットとノートパソコンはプラグで繋がっていた。

「……不便だな」

「それも仕方ないね」

「……どうにかならないものかな」

「それはどうにかなりそうだよ」

翔斗の返した言葉は龍斗にとって予想外のものだった。

どうにもならない現状をただ嘆いたつもりだったのだが、翔斗の言葉にハッと顔を上げる。

「……どういう事だ？」

「システム作るのにちよつと時間掛かるけどね。大体四月の半ばかり終わりごろになるかな」

質問に直接答えなかったが、龍斗にはそれで十分だった。

希望が持てる。

それだけで十分だった。

「ただしある程度弱くなるよ」

「……どの程度だ？」

「兄さん次第。完成が近づいたら改めて説明するよ。まだ構想の段階だしね」

構想の段階と言われ、少し不安が募ったが、すぐにその不安は消えた。

翔斗は勝算が高くない限り、不安を煽るようなことはわざわざ言わない。

「四月か」

今は一月。

龍斗は三ヶ月間を黙って待つことに決めた。

「それじゃ僕は部屋に戻るから。あ、アビソルの経歴はちゃんと消しといたから」

「ああ」

メットからプラグを抜き、ノートパソコンを閉じる翔斗に短く返事を返す。

片付けると翔斗はそのまま部屋を出て行き、その背を黙って見送った。

龍斗はベッドへと移動し、仰向けに寝そべる。

「三ヶ月か……」

ポツリと言って、目を瞑る。

しばらくすると静かに寝息を立て始めた。

時は流れ、四月になり入学式。

パイプ椅子の並んだ体育館で行われている晴れ晴れしいその式典は、ざわざわと少々騒がしい。

その理由は二つ。

一つは電高の受験テストについて。

今回の実技テストで高記録を出した生徒があり、それが噂になっているのだ。

時間は19・268秒。

電高始まって以来の高記録で、それまでの最高は20分程度だった。

たことを考えると大幅な塗り替えが行われたことになるが、噂にな
っているのはそこではなく、さらに速い1秒未満の記録が出ている
にも関わらず、その本人が誰か全く分からないことにあった。

正体不明の受験生が話題を攫ったため、今回20秒の記録を出し
た人物についてはあまり語られていない。

だが別の意味でその人物も話題にはなっている。

今現在壇上に立ち新入生代表で挨拶をしている姫里桜花、彼女が
話しのネタになっている人物だった。

壇上で挨拶しているから目立っているというわけではない。

彼女は稀に見る美人だった。

今、彼女の挨拶をしっかり聞いているものなど、ほとんど居ない
だろう。

話しに耳を傾けるより、目が彼女に見とれてしまっているのだけ
ら。

「……美人だな」

龍斗も例外なく彼女の容姿に見とれた一人であり、思わず呟いた。
それを聞いた翔斗の方は数少ない例外だったらしく、

「そう？」

と気の無い返事をしただけだった。

そんな翔斗の様子に何かしらの反応を示すこともせず、龍斗は桜
花を見つめていた。

入学式の席は前部、中部、後部と三箇所に分かれ、前から1年、
2年、3年とまとまっている。

おかげで龍斗は桜花を見るのに大して目を凝らす必要が無く、じ
つくりと観察する事ができた。

目鼻立ちがしっかりとっていて凜とした表情、腰まである長いまっ
すぐな黒髪を首の辺りで一本にまとめている。

龍斗は桜花が壇上を降りるその瞬間まで見つめ続けていた。

「兄さんが見とれるなんて珍しいね。そんなに気に入ったの？」

あまりに真剣な兄の様子を見て翔斗が不思議そうに声を掛けた。

「いや、そうじゃなく……何か……」

小首を傾げ、何かを必死に考えているが、翔斗には何が気になっているのかさっぱり分からなかった。

「……確かあいつだったよな。最高記録保持者って」

いまだに何かを思い出そうと、表情を少し顰めながらそう言った。明らかに言いたいことは全く違うのだろうと、翔斗にも分かったが、本人が分からないならどうしようもない。

そのうち思い出すだろうと、とりあえずは龍斗の口から出た話題に乗ることにした。

「確かね。何？　もしかして挑戦でもする気？」

「挑戦？　……そうだな、それもいいかもしれないな」

考えることを諦めたように、肩をすくめる。

「……本気？」

「電高のアビソルは独立空間って話だからな。それも試してみたい」

「駄目だよ」

「……だろうな」

「もう少しで完成するから待っててよ」

「分かってる。冗談だ」

果たして本当に冗談だろうか。

翔斗に一瞬そんな不安が過ぎったが、追求することは無かった。

二人は小声で話していたが回りに聞こえなかったわけではない。

後ろから不審そうな顔で見つめる人物がいたことに、二人は気がついていなかった。

入学式が終わり、人の波を掻き分けて教室へと移動した。

運よく二人同じ教室だったため途中で分れることも無く、E組の教室へと向かう。

教室は2種類に分れている。

実技試験で合格した者と筆記試験で合格した者と。前者がAからCのクラスで後者がDからFのクラスになっている。

教室の扉を開けるとパソコン付の机が綺麗に並んでいて、パソコンを弄っている生徒が何人が居た。

黒板には出席番号順で座るよう指示が書いてあり、黒板の一番上に教壇を示す長方形、その下に席を現した四角形が並び、その中に出席番号が最初から最後まで一つ一つ丁寧に書き込まれている。

ノートからパソコンへと移行して久しいこの時代に珍しいことだ。扉が開いて二人に注目していた彼らを余所目に教室半ばの黒板に指定された自分達の席へと向かう。

翔斗がまず座り、その後ろに龍斗。

ガイダンスの時間までまだ間があり、手持ち無沙汰になった彼らは他の生徒と同様にパソコンを弄り始めた。

特に何をするでもなく、インターネットで遊んでいるにすぎない。そうやって10分ほど龍斗がアビソルの装備アイテムについて調べていた頃、その隣の席に一人の女子生徒が座った。

「あれ？ 貴方達、さっきの」

女子生徒の発言でようやく龍斗は隣に座った彼女に気がつき、視線を移動させると気の強そうな女の子が視界に飛び込んだ。

容姿は目を引くものを持ち、惹かれる男は多いだろうと龍斗には思えた。

「お前は？」

観察を一通り終えた龍斗が言葉を発したことで、ようやく翔斗もパソコンの画面から彼女の方へと視線を移動させる。

「いきなり『お前』って失礼じゃない？」

不快そうに眉間に皺を寄せ抗議する。

「それじゃ『あなた』とでも聞けば良かったのか？」

「兄さん、そんな喧嘩腰にならなくても。ごめんね、失礼な兄で。ところで君は？」

「本当に失礼な人ね。まあいいけど。私は高坂叶。さっきの入学式で貴方達の後ろに居ただけど、気付かなかった？」

龍斗と翔斗は互いに顔を見合わせ、お互いに目で聞ぐが、どちらも答えは否。

その答えは叶にも通じたらしい。

「気付かなかったみたいだね。会話も良く聞こえる位置に居ただけど。……一応聞くけど、双子だよな？」

叶の発言通り龍斗と翔斗は双子で瓜二つ。違いといえば翔斗の髪は茶が混ざっている程度。

身長も180を超えるほど高く、遠くからでも目立つ。

さらにスラッとしたスタイルを持っていて、細面の顔は女性を惹かせるだけの魅力を備えていた。

「そうだよ。僕が弟の皇翔斗、こっちが兄の龍斗。名前の方で呼んでくれたらいいよ、ややこしいからね」

無愛想な兄に代わって翔斗が自己紹介をするが、龍斗はそれにかしらの反応も見せない。

「分かりました、龍斗さん、翔斗さん、これから一年よろしく願います」

「よろしく、高坂さん」

「よろしく」

龍斗がようやく言ったのはそれだけ。

「随分と無愛想だね。別にいいけど。それより聞いてて気になったんだけど、桜花ちゃんに挑戦したいの？」

「盗み聞きは良くないな」

「聞かれたくないならもつと小さな声で喋ってよ」

悪びれる様子も無く反論する。

龍斗が少しむっとした様子を見せたので、翔斗が間に入った。

「それで高坂さん、僕たちの会話はナイショにしといてね」

「知られたくないの？　なら大丈夫、私って口堅い方だし」

胸を叩いてそう言うが、二人にはとても信用出来なかった。といってそれを口に出すほど愚かでもない。

「それで続きだけど、龍斗君って桜花ちゃんと戦いたいなの？」

「桜花ちゃん？」

「姫里桜花ちゃん、今日新入生代表挨拶してた。幼馴染なんだ」

「そうなんだ。それで一緒にこの高校に？」

「まあね。私は一般、彼女は戦闘部門。私は戦闘向きの能力じゃなかったから」

ここで言う戦闘部門は実技テスト合格者の事だ。テスト内容からも分かるとおり、より戦闘向きの者ばかりが集まるため、『戦闘部門合格者』や『戦闘クラス』などと区別して呼ばれる。

「まあそんなわけで、桜ちゃんに取り次げるけど、どうする？」

「へえ、そりゃいい話だな」

眉根に皺を寄せながら言ったその言葉は、本心ではないことを物語っていた。翔斗も顔には出さないものの龍斗と同じ心情なのは、龍斗への視線が示している。

その様子にももちろん叶も気付いた。

「なんでこんな話をわざわざって考えてるよね？」

「まあな」

人は必ずしもメリットだけを考えて行動するわけではない。

しかし今日初めて会った相手に挑戦の取り次ぎなど、わざわざ自ら提案することでも無いだろう。

「理由なんて簡単。桜花ちゃんに頼まれてるんだ」

「頼まれてる？」

「そう。戦いたそうにしてる人が居たら出来るだけ取り次いで欲しいって」

「姫里さんが？　わざわざ？」

翔斗が思わず口を挟んだ。

「そうだよ。一般からだ戦闘部門に挑戦しにくいって話を聞いた」

てたから。そういう人が居れば取り次いで欲しいんだって」

「それは一般の人と戦いたいって事か？ 戦闘クラスが一般と戦いたいなんて珍しいな」

普通は戦闘クラスの生徒はあまり一般とは戦いたがらない。戦闘能力の高い者ならすでに戦闘クラスにまとまっており、わざわざ一般クラスの相手をするよりも同じクラスでやっていればそれで済むからだ。

もちろん、逆に手合わせを望む者も居るが、それはごく少数。

だが姫里桜花はその少数に属しているらしい。

「桜花ちゃんは上昇志向がかなり強いからね」

ちよつと呆れたような、それでもどこか誇らしげに叶は答えた。

「それで、どうする？ 戦いたいなら桜花ちゃんに言うけど」

翔斗は龍斗へと視線を向ける。

その視線を受けるまでもなく龍斗の答えは決まっていた。

「何で話しを持ってきたのかは分かった。分かったけど、遠慮しくよ」

「そう？」

断られることも想定済みだったようで、断られた事に対して気を悪くしたという様子は無かった。

「分かった。気が変わって挑戦したくなったら私に言ってくれたらいいよ。多分その前に紹介する機会があるかもだけど」

「ああ、その時は頼むよ」

その時、まるで会話が終わるのを見計らったかのように教室の扉が開いた。

いつの間にか教室には生徒で埋まり空席が無い。

入ってきたのは小柄な女性。学生の制服でなく、スーツ姿から教師だと推察するのは容易だが、もし学生服を着ていたら生徒にしか見えないだろう。

女性が教壇に立った。

「はい、皆さん始めまして。私はこのクラスの担任になりました中

西恵子といひます。これから一年間よろしく願ひします」
ゆつたりした口調で、とても教師という感じがしなかつた。
「それでは皆さんのこれからの生活について説明します」

2時間のガイダンスを終えたとき、クラス全員がくたびれていて
元氣そうなのは恵子ただ一人という有様だつた。

ゆつたりした口調は聞くのになかなか勞力がある。

「以上です。何か質問ありますか？」

そう聞かれてもそんな元氣の無いものがほとんどだつたが、手を
上げたものが一人。

「はい、そのえつと——若月、未来君ね。どうぞ」

教壇に備え付けられているパソコンへと目をやりながら恵子が生徒
徒の名前を呼び上げる。

おそらくパソコンの画面には名簿が映っているのだろう。

手を上げたのは窓際、男子の一番後ろに位置する席に座つた生徒
だつた。

龍斗が彼を見る。

その若月未来という生徒は肌が浅黒く、筋骨たくましい生徒だが、
表情は温和そうで争いごととは好まないように見えた。

「一般クラスは戦闘に関する授業は一切無いんですか？ 少ない程
度だと俺は思つてましたけど」

電高は戦争の兵士を作る政府の機関という側面を持つ。

それを考えると戦闘の授業が一切無いというのも確かにおかしい。
いくら戦闘能力が高くないと言っても、皆無というのは考えにく
い。

「その説明をしてなかつたわね。最初にはつきり言つておきます。
このクラスに戦闘に関する授業は一切ありません。正確には教師に
よる能力強化の授業はありません。

何故かというこの一般クラス、戦闘クラスという分け方は戦闘

能力の高い低いで分けているというわけではなく、教師が戦闘について教えることが可能かどうか、を基準に分けているからです」

龍斗は入学前に配られた資料にそんな事が書いてあったことを思い出した。だが戦闘に関する授業の有無については書いてなかったようで、覚えが無い。

そもそも未来が言うまで気にもしていなかった。

「一般的に戦闘能力がBクラス以上だと個別能力は比較的大別しやすいものが多くなります。そのためどうやれば能力が向上するか教師の方で判断が可能になり、より効率的な訓練が期待できます。

ですが体系から外れる能力はまだ多く、戦闘クラスでもその半分は体系から外れます。そういった未だ確率されていない体系の能力者である彼らには、自分達自身で能力強化を図ってもらわなければなりません。いくら戦闘クラスといえどもです。

一般クラスの生徒は戦闘能力こそ低いものの、それはただ試験に合っていなかっただけの人が多いでしょうし、特殊な能力者も多いでしょう。能力の種類については生徒の数だけあるといっても過言ではありません。

戦闘クラスでさえ半分の能力者には自主訓練に任せるしかない中で、教師が教えていくという事は不可能です。

しかし自主訓練のための時間自体は、授業の一環として組み込まれています。教師が教えられることは皆無だと思っていってください。これで分かりましたか？」

恵子が未来に確認を取る。

「はい、分かりました。ありがとうございます」

未来がそう答えてほっとしたのは龍斗だけではあるまい。

恵子の説明は丁寧なのだが、どうにもあのゆったりした話し方にはとても慣れそくに無い。だが内容自体はかなり重要なもので今後の生活に大きく関わりそうだった。

龍斗と翔斗には無関係だったが。

「それでは次の質問は？」

周りを見渡すが誰も手を上げずにいる。

質問があってもあえて手を上げ無いのかは龍斗には判断がつかない。

しばらく恵子が見回して、

「質問はもう無いみたいですね。それでは今日はこれで授業を終わります」

授業というよりも説明会だったがそんな細かい事を気にするものは居らず、恵子が教室を出ると席を立つ生徒が大勢いた。

すでにいくつかの集団が出来ているのは、龍斗としては不思議でならない。

人付き合いが苦手なわけではないものの、今日会ってその日のうちに、という感覚が理解できないからだ。

教室の空間から一人取り残されたように周囲のクラスメイトを観察していると、翔斗が立ち上がったって龍斗へと顔を向けた。

「僕たちも帰る？」

龍斗は少し考え込んで、

「V教室だけ覗いて行くか」

「ああ、アビソル出来る教室だっけ？ いいよ、行く」

龍斗が立ち上がると隣の叶から声を掛けられた。

「V教室行くなら一緒に行かない？ 私もそっちに用あるし」

「ああ、いいけど」

特に断る理由も無かったので龍斗は承諾し、三人でV教室へと向かうことになった。

02 アビソル

ヴァーチャル教室、通称V教室ではこの学校で唯一アビソルが出来る教室となっていて、全部で四つある。

三つまでは学年ごとで分かれており、一年の教室は一階、三年の教室は三階と分かりやすい。

残り一つは専用の棟にあり、予約制になっているがこの学年でも使用可能だ。

電高では兵士育成を兼ねた情報防衛施設でもあり、その性質上常に他国からのサイバー攻撃にさらされているが、もちろん防衛対策は十二分に機能している。

だがその結果、アビソルがプレイ不可能という支離滅裂な状態になってしまったのだが、政府がキューガクに働きかけて電高専用のアビソルを作らせ、新しく独立した擬似アビソルが完成した。

通常のネットワークに接続出来ず、世界各地を舞台にした戦闘も不可となっているが、内容自体は変わらず個別能力値も通常のアビソルと全く変わりはなく、擬似アビソルで上がった能力は通常のアビソルでも適用される。

余談だがキューガクはこの擬似アビソルのシステムを他にも売ること結構な儲けも出したらしい。

「そっぴや用事って何なんだ？」

V教室に向かいながら龍斗は唐突に、翔斗と会話に興じていた叶に聞いた。ちなみに龍斗が左、翔斗が真ん中、叶が右を歩いている。

「桜ちゃんとの待ち合わせ。むしろ用事があるのは彼女の方だよ」

「姫里桜花さん？ 彼女が来るんだ。良かったね、兄さん」

翔斗が意味ありげな視線を龍斗へと向ける。

入学式での美人発言を受けてなのだろうが、龍斗には翔斗が冗談なのか本気なのか取りかねた。

「へー、桜花ちゃんに興味あるんだ。意外と早かったけど、いい機

会だから紹介してあげるよ。良かったね、お近づきになれて」

「……おいおい、勘弁してくれよ。そりゃ美人だとは言ったけどさ」

「あれ？ 本当に興味あったんだ、冗談だと思ってただけ」

「兄さんは結構女好きだからね、叶さんも気をつけた方がいいよ」

「そうみたいね、気をつけます」

クスクスと笑いながら叶は機嫌よく答えたが、それに対して龍斗の表情は冴えない。

翔斗と叶は気があったようでもすぐに仲良くなったのだが、龍斗はどうも叶が苦手だった。というのも翔斗と仲良くなるや一緒になつてからかつてくるからで、図々しくかなり面倒臭い。

翔斗が何度もネタにしているのが原因だが。

初対面だったはず、と龍斗は疑問に思うほど翔斗と叶が慣れしたんでおり、その影響が龍斗まで及んでいた。

多少うんざりしながら、一階のV教室へと到着した時にはもはや二人に追従する形になっていた。

「結構早めに来たと思ったんだけどなあ」

「思ってたより随分と居るね」

先に教室へと入った二人がそうぼやく。

続いて龍斗が中に入ってみると二人の言った意味が分かった。備え付けのアビソルが半分はすでに埋まっていて、それぞれのプレイヤーの周囲にも2、3人と集まり結構な人数になっている。

「ここがV教室か」

だが龍斗の興味はすぐに生徒達から教室そのものへと移動した。

正面に掛かったホワイトボード、両端の二列と内側に二列ずつ向かい合った四列の机、全部で六列の机にそれぞれ設置された計120台のアビソル、アビソルが四台ずつ繋がったパソコン、教室の真ん中に位置する天井にまるで六角形を描くように設置された六つの大きなモニター。

龍斗は二人を忘れ、近くのプレイしている生徒達の所へと歩を進めた。

始めたばかりなのか、ここにはまだギャラリーが居ない。

四人の椅子に座ったプレイヤーの後ろから、真ん中のモニターを覗き込む。

アビソルのプレイ中は普通外野の人間からは見る事が出来ないが、パソコンに専用のソフトを入れたら話しは別だ。

それぞれアビソルと繋がっているパソコンはモニターとしての役目のみを担っているようで、龍斗が覗いたパソコンには画面が四分割され、草原の中にそれぞれにプレイヤーキャラが映っているのが見えた。

キャラの体格、特に頭部部分はプレイヤー側で変更などの操作することが出来ない。

これは実際の体格と違うものを操作した時、脳にかかる負担が大きい事が実験段階で分かったための安全装置としての制限で、特に頭部部分は脳波の影響を大きく受けているらしく、少しいじるのも危険だとキューガクは判断したため、一切いじることは出来ない。

ただ、体格の外見だけは多少変わっている。

全身の基調は黒、間接部分に丸みを帯びた模様が付いているが、模様は個人で色が違っており、ある者は赤、ある者は青などをしている。この状態がキャラの基本、一切の装備を外している姿となっていて装備すると肌色へと変化する。

龍斗の見たモニターには四人全員がこの基本形態で装備は一切していない。

この高校に入学出来るレベルで装備が一切無いとは考えられず、そういうルールでやっているということなのだろう。

上二人の画面が女子、下が男子、個別の運動能力や能力を駆使して戦っているのが見えた。

「誰が勝つと思う？」

いつの間にか横に居た翔斗が声をかけた。叶もその横で画面に見入っている。

「さてな、運動能力自体はあの右下の奴が一番高い、けど能力が分

からないからな。まだ二人、能力を使っていないのが居る」

龍斗の見える限り左上と右下のプレイヤーは能力を使わず戦っている、または能力を使えずにいる、ということかもしれない。

能力によっては条件次第で使用が出来ないものも少なくない。どういう場であつたとしても自分の力を十分に発揮できることは上級プレイヤーの必須事項だ。

電高の試験でもあるBランクの実力試験などは、周囲に遮蔽物や武器などのあらゆるものが無い状況でどう対処するか、というかなり厳しい内容で合格率は5%に満たない。

ただしランクEの武器の持ち込みだけは許されているが、最低ランクの武器を使って合格するものはさらにその1割以下。

だがそれで合格する者は例外無く臨機応変の上級プレイヤーだ。

「あの二人、どんな能力者かな？」

翔斗は楽しみで仕方無さそうだった。

龍斗も人の事は言えず、少々焦れていたものの楽しみだった。

見ているうちに右下のプレイヤーの打撃よって二人が倒され、左上と右下の一騎打ちになった。

左上のキャラ名は『ヨウコ』と表示され、右下は『拓海』となっている。

ヨウコは小柄なショートカット、少女と形容するのが相応しい子で、いたずらっ子のような表情を浮かべながら楽しそうに駆け回っている。

一方、拓海はいかにも武人といった風体で、細身であるのに筋肉が締まり（実際の拓海を見た）、何より鋭い目つきが彼の雰囲気をとげとげしいものになっていた。

「右下の人、使ってる様子無いよね？」

する必要も無い小声で翔斗が龍斗に聞いた。

「ああ。二人倒した時も素手で体力削ってたしな。強化系統の能力者かと思っていたが、体力の減り方に別段変わったところも無し」
それぞれの画面の左上、キャラ名の下に赤い体力ゲージが付いて

いる。これが無くなると敗北となり、基本ルールでもある。

拓海は能力を使わず二人を殴り倒していた。女子を殴るのに抵抗は無いらしく、躊躇は無かった。見ていてあまり気持ちのいいものでは無いが、このゲームをやっている限り同じ場面には何度も出くわすことになる。

まして電高に受かるぐらいなら何度もやっていて慣れるのが当然だろう。

現実とゲームの区別が付かなくなったら問題だが、今はそんな心配をしている時でもない。

モニターには拓海がヨウコを追いかける映像が映っている。

拓海は多少息を切らしているのに対して、ヨウコはまだまだ元気だ。アビソルの体力の観念は現実依存するので、拓海に体力が無いという評価をするより、走り続けているのにまだまだ元気そうなヨウコが人の体力を逸脱している。

戦況が突然変わったのは拓海のモニターがクロースアップした数秒後。

「ヨウコさんの能力、みたいね」

拓海の画面が突如緑で覆われたのを見て叶はそう言った。

直前まで二人共走り回っていただけ、ヨウコが逃げてそれを拓海が追いかけていただけだったが、それが突然拓海の画面が何かで覆われ、拓海の体力ゲージが一気に減っていく。

数秒後、1P W I N N E Rの金文字が真ん中に表示され、ヨウコが勝者だと示した。

現実のヨウコと拓海がメットを外す。ちなみに残り二人は負けた勝負には興味が無いのか、すでに場所を変えて別のプレイヤーと勝負をしていた。

「ふう、楽しかった。またよろしく」

「……このルールではもうやらん」

最初がヨウコで次が拓海の台詞だ。ヨウコは言葉通り楽しかったのだろう、満面の笑みを浮かべているが、拓海の方は憮然とした様

子だった。

最後は何があったのか、気になるところだった。がそれを聞くのはマナー違反だろうと三人は理解していた。実際にプレイして相手の能力を推測していくのもこのゲームの醍醐味だ。

だがそう思わない者ももちろん存在して、「今何があったんだ」といつの間にか出来ていたギャラリィから声が上がった。

「自分で考える」

相変わらず無然とした調子で拓海がそっけなく言うと、肩を怒らせながらV教室の出口へと向かった。

周囲が拓海の発言を受けてざわざわと推測を始めたが、一人そんな事を気にも留めず、

「さつてと。次誰かあたしとやらない？」

とヨウコが後ろの野次馬集団——というよりも龍斗たち三人——に振り向き、まだまだやり足りないといった様子で尋ねた。

「それなら私の相手をして貰おうかしら」

反応したのはいつの間にか三人の後ろに居た人物。

声に反応して振り向いた龍斗には、ただ立っているだけの彼女が他の何者よりも目立って見え、凜とした雰囲気の後じさりそうになるほど、彼女の魅力に圧倒された。

「桜花ちゃん、いつから居たの？」

「丁度宝生君が二人目倒した辺りかな、集中していたみたいだから声掛けにくくって」

括られた髪を靡かせながら、椅子に座りアビソルのメットを手取る。

「主席合格者様がお相手してくれるんですか、こりゃ気合いいれないといけませんな。他に誰かやらない？ その双子君はどう？」

ヨウコは龍斗と翔斗の二人に向かって声をかけた。翔斗がすぐさま、

「僕たちは遠慮しておきます。姫里さんに勝てそうな能力じゃないですし」

龍斗は少し戦いそうにしており、翔斗が「僕たち」と龍斗を含めることでそれを留めたが、「ふん、意気地無しなんだ」と桜花が小さく呟いた一言には、さすがに翔斗も顔を引きつらせていた。
だからといって挑発に乗ったりはしなかったが。

03 主席合格者

「仕方無い、一対一でやりますか」

「待った。俺がやる」

いつの間に居たのか、ヨウコに反応したのはさっきの若月未来だった。

龍斗は未来がここに居たのも驚いたが、周囲を見渡すと10人以上のギャラリーが出来ている事にも驚いた。

「いつの間に集まってたんだ？」

「姫里さんが座つたのとほとんど同時に集まってきたみたいだよ」

龍斗より少し後ろに居た翔斗の方が周囲の様子を把握しやすかったようだ。

「一秒以下でクリアした人が居る、なんて噂も立ってるけど、それでも桜ちゃんが実技試験での最高記録保持者だからね。誰さんは容姿の方にばかり目が行ったみたいだけど」

入学式の事を思い出しているのか、叶の口調には多少の棘が含まれていたが、龍斗は気にした様子が無い。というより後半部分は聞いてない。

「最高記録保持者、か。どんな戦い方するか楽しみだな」

「ルールはさっきと同じみたいだね」

まだ分割されていない画面に文字が並ぶのを見て翔斗が呟く。

そこには『装備無し』や『エリアD【草原】』などが表示されていく。

ルールの設定は通常1Pに、この場合ヨウコに任されているが、意に沿わないルール等があれば他のプレイヤーも口を出すことが出来る。

選択中はメットの内側に表示され、希望のルールをそれぞれが提示し、1Pが取りまとめ設定するがそこで意に沿わないルールがあれば、それを巡ってランダム選択がなされる。

最後に結果が表示されるが、結果のみパソコンにも表示される、というシステムになっている。

なので今出ている表示はすでに彼女らで決定したルールだ。ルールの表示が消えて数秒後、先ほどと同じ草原のフィールドに、等距離で配置された三人が画面に映った。左上にヨウコ、右上には『オウカ』、左下に『未来』と表示されていて、それぞれ装備品は無く、基礎運動能力と個別能力で戦うことになる。

「若月が僅かに不利だな」

「え、どうして？」

龍斗がボソリと呟き、聞こえた叶は不思議そうに聞いた。

まだ誰も動いておらず、判断するには早いように思えたからだ。

「若月君の能力にもよるけど、彼は僕たちと同じ一般クラスでしょ？それは戦闘に向いていない可能性が高いつてことだからね。それに対して姫里さんは高い実力持つてるし、ヨウコって人は少なくとも相手を一蹴出来るだけの能力は持つてる。そういう事だね？」

翔斗は叶にそう説明し、龍斗に確認を求めたが、彼はもうそんな事に構っている暇は無かった。

戦況が動いていたからだ。

開始直後にすぐ動いたのはヨウコだった。

めまぐるしく草原を走り回り他二人を翻弄しようとしている。

それを未来はオウカに注意を払いつつ追いかけるが、オウカは最初からじつとして動かない。

「動かないな」

どこからかそんな声も聞こえた。

ただじつと鬼ごっこをしている二人を見つめるだけで、動く様子は未だ見せない。

「叶さん、解説」

翔斗が叶にオウカの行動、いや不動に対して説明を求める。

「それが桜ちゃんの戦術つてただだよ。相手の基礎能力を確認して

から行動するのは。まあほとんど意味は無いんだけどね、一瞬で決まることが多いから」

オウカの行動に意味が無いと最後に否定したが、動かない理由はよく分かった。

龍斗は最初、相手を嘗めてかかったための油断、それがハンデでも与えているつもりかと思ったが、叶の話を聞く限りいつもの戦術と変わらないようで、半ば安心した。

初めて戦う相手に油断するようでは個人能力が優れているというだけで、大した使い手でもない。

強い方が面白い戦いを見せてくれるもので、期待できる。

「あ、若月君の画面が」

「ヨウコさんみたいね、さっきと全く同じだし」

先ほどと状況が全く拓海の時と同じだった。

今回もまたクローズアップした数秒後に画面一杯緑色で覆われ、何も見えない。

画面は適当なタイミングで様々に切り替わが、決してプレイヤー側で操作は出来ず、完全なランダムだ。

なので状況が同じなのは偶然にすぎない。

「ヨウコが笑ってる所を見るとうまくいったみたい——ん？」

ヨウコは未来の方へと右手を上げて能力を発動したような様子を見せ、笑みを浮かべていたのだが、突如その笑みが消え、目を丸くした。

視線を未来の体力ゲージに移動させると全く減っていない。

ヨウコがまた駆け始めると同時に未来の画面が切り替わると、そこに映った画面は草原には無い異常なものが映りこんでいる。

「何ですか、あれは……」

叶が思わず呟いてしまうのもそのはずで、草原のはずの一箇所に直立したままの状態で一塊の草が3メートルほど伸び、その横に未来が草に手を掛けて立っていた。

再び未来がヨウコを追いかける。

「自然系能力者みたいだね」

「珍しいな。さっきの拓海って奴は多分あれでやられたって事か。あの高さで直立したままのところを見ると、一本一本にそこその攻撃力もあるんだろうな」

「遠距離攻撃の自然系統か。使い方次第で化けそうだね」
「だな」

龍斗と翔斗が暢気に分析をするなか、突如、ヨウコを追いかけていた未来が後ろへと飛んだ。

すると未来の目の前を突風が吹いたように草が激しく靡いた。キツときつい視線をオウカに送ると、オウカは右手を未来の方へと向けていた。

ヨウコが草原を二転三転と転がる。

周囲が急にざわめき始め、興奮が龍斗達にも伝わってくる。

とりわけ龍斗の目つきが一際厳しいものに変わった。

「姫里さんが動いたみたいだね」

「そうだな……」

「どんな能力使ったんだろうね、二人同時攻撃が可能な能力か。ヨウコさんの方は吹き飛んだよ」

「そうだな……」

「ヨウコさんも何されたか分かってないみたいだね。体力はまだ少し残ってるけど——また吹き飛んだ。ヨウコさんはゲームオーバーだ」

「そうだな……」

「……兄さん、聞いてる？」

「うるさい」

「え……あ、うん、ごめん……」

龍斗は桜花の一挙手一投足を見逃すまいとそちらに集中し、まともな受け答えをする気が無いらしい。

二人の会話を聞いていた叶は呆れ気味に、

「……龍斗君って、結構面白い人だったんだね……」

と、一言。

面白い人にされた本人は、そんな声などもう耳に入っていないなかった。

ゲームオーバーになったヨウコはメットを取りながら、

「あー、もー、負けたー。あたし何されたのー!？」

やはり何をされたか本人は分かかってないらしい。といつてもヨウコに限らず、叶を除いた全員が分からなかったが。

「若月君、何かを避けてるみたいだね」

「見えてるみたいだね。五感系統の能力者で視覚か触覚の能力者か？ シックスセンスって可能性もあるな」

「みたいだね。この能力じゃ戦闘クラスの受験はきつそうだ。けど今避けれているのは、その能力のおかげなんて皮肉だね。……それにしても何を飛ばしているのか、さっぱり分からない」

未来は右に、左に飛び何かを必死に避けている。

『やりますね。それでは、もう少し本気でいきますよ』

突如モニターから音声 flowed。

オウカが喋ったのだ。

次の瞬間、何かを飛んで避けた未来が、そのまま上空へとさらに飛んだ。足を上にして、まるで何かに引っ張られるように。

ある程度まで上空に行った後、一旦止まり、今度は頭から落ちた。
「決まったな」

未来の画面も暗くなり、ゲームオーバー。

2P WINNER の表示が出ている。

「参ったな。何も出来ないとは……」

未来がメットを外しながら悔しそうに言った。

「いえいえ、大したものですよ。あんなにうまく避けられるなんて思ってもいませんでした」

桜花もメットを外し、本心から言った。

実際、全く見えない攻撃をあれだけ避け続けられる、というのは相当な能力者だ。

「そう言ってもらえると有難い」

悔しそうな表情は多少和らいだが、代わりに何かを考え始めたようにでメットを手に持ったまま、椅子から立とうとしない。

その未来の様子に気付いているのか、いないのか、桜花はメットを外して立ち上がると大きく伸びをする。

「ねえねえ、オウカちゃんってどんな能力使ってたの？ あたしって何でやられたの？」

椅子に座ったまま、観戦していたヨウコがその場にいた全員が感じていたであろう疑問を桜花にぶつけた。

「ふふ、ナ・イ・シヨ」

片目を閉じながら茶目つ気たぷりに言ったその様子は、女のヨウコからしても赤面するほど可愛い素振りだった。

「それに聞くのはマナー違反。自分で考えましょうね」

叶の方へと向き直る。

「それじゃ、帰りましょうか」

「え？ もういいの？」

「うん。一回、やりたかったただけだから」

「そう？ なら私はいいけど。あ、桜ちゃんに紹介しとくね。双子の皇龍斗君と弟の翔斗君。クラスメイトで隣の席になったんだ」

「初めまして。僕が翔斗です、よろしく。ややこしいから名前の方で呼んでください」

「え……」

翔斗の顔を見たときに、桜花が少し固まった。

その顔は驚きに満ちている。

「桜花ちゃん？」

叶に声を掛けられ、ハツと自分を取り戻した。

「あ、ごめんなさい。A組の姫里桜花です。私も名前の方で呼んでいいですよ、そっちの呼ばれ方の方が好きなんです。……ところでそちらの龍斗さんは一体？」

そう言われて翔斗を見ると、龍斗はすでに暗くなった画面を凝視

し続け、何かを考え込んでいる様子で今までの会話をまるで聞いていないようだった。

「兄さん、どうしたの？」

龍斗はハッとして振り向いた。

「あ、悪い。ちょっと考え事してた」

「そう。ちゃんと桜花さんに自己紹介してよ、失礼だから」

翔斗にそう言われ、桜花の方に向き直る。

「すまない、失礼した。D組の皇龍斗、こいつの双子の兄だ。ややこしいから名前の方で呼んでくれたらいい」

「……A組の姫里桜花、私も名前で呼んでください。あんなに集中して何を考えていたんですか？」

翔斗には何を考えていたかすぐに分かったのであえて聞くことをしなかったが、桜花にはあの様子が気になったようだった。

聞かれた龍斗は小さな笑みを浮かべ、

「桜花の能力が何か、考えてたんだ」

「私の能力ですか？　かなり特殊ですから分からないと思いますよ」

「若月が頑張ってたからな、ある程度の見当はついたよ」

不敵に笑いながらそう言くと、悄然とした様子で座ったまま聞いていた未来が、

「本当か？　俺は、何をされたんだ？」

と顔を龍斗に向けてゆっくりと問うた。

どうやら椅子に座ったまま考え込んでいたのはその事だったらしい。

「聞くのはマナー違反」

龍斗は一言だけ告げ、推測すら話す事を拒否した。

「……そうだな。これは俺が悪かった、忘れてくれ」

一言謝ると、さっと椅子から立ち上がり出口へと向かったが、途中で振り返り、

「ヒントをありがとう」

と軽く頭を下げると再び歩き出し、帰っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7370x/>

電子防衛学校のゲーム戦士達

2011年10月21日01時02分発行